

2022.9.2. 鹿島平和研究所 国際政治経済研究会

インドの行動原理—ロシアのウクライナ侵攻でも貫かれる戦略的自律性

伊藤 融(防衛大学校)

1. 「理解できない国」としてのインド

2022年5月24日 日米豪印(クアッド)首脳会合

2022年5月19日 BRICS 外相会合、ロシア産原油購入、自衛隊機拒否

2. 台頭するインド—インドはなぜ重要か

世界最大の民主主義国 有権者数9億人(2019年総選挙)

英仏並みのGDP

世界第3位の軍事費

3. インド外交のDNA

(1) 強い大国志向

南アジア～圧倒的なパワー、「地域超大国」

近年の中国の影響力浸透→「巻き返し」の必要性

世界～冷戦期の限定的なハードパワー

→「理念」の外交 ex. 非同盟運動

冷戦後のハードパワー増大→「世界大国」へ向けた外交

(2) 自主独立外交へのこだわり

「同盟」を忌避、「ジュニア・パートナー」の否定

冷戦期の「非同盟」※ソ連との平和友好協力条約の反省

冷戦後の「戦略的パートナーシップ」～すべての大国、新興国と緊密な関係

「戦略的自律性」は維持

(3) 「アルタ的リアリズム」の伝統—「プラグマティズム」としての「リアリズム」

カウティリヤ『アルタシャーストラ(実利論)』

・徹底したアルタ＝国益追求の正当化

・「弱肉強食」としての「国際社会」

・「隣接国」は本質的に「敵対者」

・永遠の「友邦」は存在しない

「アルタシャーストラ」の対外政策

パワーの慎重な計算に基づく「6計」～和平・戦争・休止・進軍・庇護要請・二重政策

4. 「域外修正主義」と「域内現状維持」の力学

パワーの格差に基づく選択

ex.)非同盟運動、NPT拒否、WTOやUNFCCCでの異論

カシミール問題、SAARC への消極的姿勢

↓

インドの「庭」としての近隣=「域内」への中国の影響力拡大にどう対処・対抗するか?

→現在の「インド太平洋」における日米豪印連携

「近隣第一政策」で周辺国に接近

自前の軍事力増強

5.主要国との関係

(1) 緊密化する印米関係

1990年 米国の対パキスタン軍事援助を停止

1990年代後半 インドの戦略的価値の評価 ←中国の台頭

1998年 インド核実験 →関係緊密化の障害の除去、印米戦略対話の開始

2000年 クリントン訪印～米国による印パの「切り離し」「ディハーフネーション」

2004年 「戦略的パートナーシップのつぎのステップ(NSSP)」

2007年 印米原子力協力協定

2010年 オバマ訪印、インドの常任理事国入り「支持」

2015年 オバマ訪印、インド共和国記念日主賓

第1回日米印外相会合～「インド太平洋」における3カ国の協力推進

2016年 印米兵站交換協定(LEMOA)～軍事基地の相互利用へ道筋

2017年 トランプ政権「国家安全保障戦略(NSS)」

～インドは「指導的グローバル・パワー、より強力な戦略・防衛パートナー」

2018年 米、対パ援助を再び停止

印米外務・防衛閣僚級協議(2プラス2)の開始

通信互換性保護協定(COMCASA)締結→印米両軍の相互運用性向上

(2) 「関与」と「警戒」の対中関係

1949年 中華人民共和国成立→インドはいち早く承認

1954年 印中平和五原則→1955年 バンドン会議

1958年 中国によるアクサイチン道路建設

1959年 チベット反乱、ダライ・ラマのインド亡命

1962年 印中国境戦争→インド敗北 →敵対関係へ

1988年 ラジーヴ・ガンディー首相訪中

→国境問題についての合同作業グループ設置、首脳外交活性化

1998年 インド核実験に伴う一時的な冷却化

2005年 「平和と繁栄のための戦略的・協力的パートナーシップ」

2008年 中国がインドにとっての最大の貿易相手国に(印側の大幅な入超)

投資は伸びてはいるものの依然低水準

印中の対立要因と協調要因

中国の何を警戒するか?

- ・インドの対中脅威認識

中国は正規戦では最大の脅威

未解決の国境問題 → 継続する国境交渉と度重なる緊張

2017年 ドクラム危機

2020年 実効支配線(LAC)での衝突 → 45年ぶりの犠牲者

それでも必要な中国への関与

- ・隣接する台頭する市場の重要性
- ・経済的な多国間レジーム形成

国連気候変動枠組条約締約国会議

WTO ドーハラウンド自由化交渉

公正な経済秩序の構築やドル中心の国際通貨秩序見直し

多極世界の実現、国家主権尊重

(3) 「時の試練を経た」対ロ関係

1971年 印ソ平和友好協力条約

1993年 印ロ友好協力条約

2000年 プーチン大統領訪印、「戦略的パートナーシップ」宣言

印ロの緊密な関係の要因

- ・兵器分野でのインドの対ロ依存／最大の顧客としてのインド
 - ミグ戦闘機をはじめとした旧ソ連に由来する兵器体系
 - ロシアの退役空母ゴルシコフの導入
 - ブラーモス・ミサイル、第5世代戦闘機など共同の研究開発、生産に向けた動き
- ・原子力協力
 - 古くからのパートナー
 - インド側の濃縮・再処理の権利、および燃料の安定供給をふくむ協定
- ・インドの政治大国化を強く支持するロシア
 - 国連安保理常任理事国入り
 - ・単独行動主義や一極支配への反対、国家主権尊重
 - ・隣接する中国への懸念
 - ・パキスタン政策でのインドの立場支持

3つの関係の「使い分け」

域内現状維持 → 米国、ロシア

域外修正主義 → 中国、ロシア

域外におけるインドの地位向上 → 米国

← 大国志向実現 + 戦略的自律性確保 + アルタ的リアリズムの発想

地政学状況—海洋国家であり大陸国家でもあるインド

海洋の関心

インド洋、「インド太平洋」(の一部)

→クアッドへの関与と期待 西インド洋は?

大陸の関心

「敵対国」中パ(連携)の脅威

「友邦国」の減少～イラン、アフガニスタン、ミャンマー→関与困難

→インドにとってのロシアというカードの意味

→しかしロシアの中国依存が加速すると….

=インドのジレンマ

6. 日印関係の限界と可能性

対中認識の温度差

①新興国のインドと先進国の日本～印米関係と同様の問題

②「非同盟」／「戦略的自律性」重視のインドと対米同盟を基軸とする日本

～有事の際には独力で対処することが前提のインド→慎重な対応の必要性

③直面する脅威の現場

日本～尖閣・東シナ海、(南シナ海)

インド～陸の実効支配線(LAC)、インド洋、(南シナ海)

→ただし、習近平体制下の中国の攻勢によって、海洋では脅威認識の収斂も

～南シナ海、インド洋の北半分

(2) 軍事協力の制約

日本の憲法・法制度上の限界

インド・ロシアの密接な軍事協力

(3) インド内外の連結性インフラ開発支援

・「南北輸送回廊」

～イラン・チャーバーハール港、アフガン、中央アジア、ロシア、ヨーロッパ

→中パ経済回廊(CPEC)へ対抗

・インド北東部のインフラ整備→インドとASEANの連結性向上

・「アジア・アフリカ成長回廊(AAGC)」

(4) 「債務の罠」問題への対応

スリランカ・ハンバントタ港の教訓

(5) 脱中(ロ)のサプライチェーン構築

(6) インド近隣国の民主化・安定化に向けた協力

←日本はどの国とも良好な関係